

●所在地

三重県四日市市笠山町 574-1 亀山製糸笠山工場跡

●四郷地区

概要一 四日市市の中央よりやや南側に位置し、その地形は八王子から東に向けての丘陵（八王子丘陵）、天白川低地、波木から岡山にかけての丘陵（南都丘陵）により成り立っている。

・八王子丘陵は市内で唯一の風致地区の指定を受けており、自然にも恵まれた環境となっている。

歴史一 古くは農業、製茶、醸造業で栄えた地域だが、幕末となり伊藤小左衛門と伊藤徳七により、製糸業、紡績業が行われ始め、急速に発展した。

・現在はそれらの産業は衰退してしまっているが、現在も歴史的建造物や文化が残る、歴史的にも文化的にも重要な地域である。

現状一 戦後の団地造成による新しい街づくりにより、現在では市内でも随一の人口を誇る住宅地となっており、店舗には保育園や幼稚園、小・中学校などの教育施設も充実している。（総人口-24348 人、平成 23 年 7 月現在）

・上記のように、歴史的に重要な建造物が多く残っているが、中には保存・補修もされないまま放棄されるものや、無秩序な住宅地開発などにより取り壊されてしまうものもある。



●亀山製糸（株）笠山工場（旧伊藤製糸第二工場）

伊藤製糸部は、伊藤小左衛門（五世）が明治 7 年に製糸製糸場として開業。その後、伊藤小左衛門（六世）の時代に発展を遂げ、明治 36 年 4 月、この工場は第二工場として完成した。平成 11 年創業はこの工場は、老朽化を理由に取り壊しが表明されたが、各方面の尽力と会社側の良識で、製糸工場、事務所、正門などは残された。

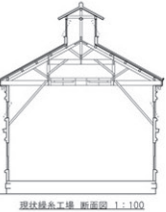
●製糸工場の建築

外観一 この明治建築は緑糸・再編を行うための工場で行うための 37 間、梁間 5 間の細長い建物で、西側の 2 間は後世の増築である。外観からすると、窓が上下二層に分けられて床を示すように水平材で二つに分かれるので、木造二層建てのように見えるが一階建てであり、屋根は寄棟、柱瓦葺、棟には切妻の屋根垂を付けた枝瓦葺をしている。

・軒間の丹念な仕事の実績、通称する窓の構造は、一旦する工場とは思えず、軒間や窓間の細い「足間」はいかにも明治の準備された製糸工場建築の特徴である。

構造一 小屋組みは洋風の対木小屋組（ケーンボストラス）で、中央付近に相対する位置材（対梁）をもつ。

このように、外観と内部の印象は全く異なり、構造面では使役の補強も必要に上されているが、明治の雰囲気もよく残す数少ない工場建築として貴重である。



この製糸工場は、富岡製糸工場とともに産業の近代化遺産であり、製糸業が国家に貢献した歴史的モニュメントといえる。民間所有の建造物が地域社会、住民にとってプラスに働く。これからの再活用の方法を探していかなければならない。

concept

concept 1 — まちに向け込むコミュニティセンター

本来、コミュニティセンターとは、文化活動や生涯学習を通してだけれど、だれとでも交流できる、市民の交流の場である。しかし、現在のコミュニティセンターは、講座などの存在を知っている人が利用し、一部の利用者だけ交流する施設となっており、大部分の人は講座などの存在も知らず、興味をもつ機会さえない。そんな既存のコミュニティセンターをまちに向け込ませることで、より市民に身近なものとし、本来の交流の場としての役割を取り戻させる。

concept 2 — 歴史的建造物のあり方

現在まちには、文化財には指定されないが、歴史的・文化的に貴重な建物が多く残っている。観光地では、その中で資源として再活用されているものもあるが、住宅地となった土地では、その多くは価値を無視され取り壊されたり、保存・補修もされないまま放棄されている。このような現状の中、これからの歴史的建造物の、まちの中でのあり方を考えた。

計画

一倉山製糸登山工場跡地に小さなアーバンヴィレッジを形成し、コミュニティセンターを構い交差。まちの中の交流の場をつくり出す。

一既存の緑系工場をコンバージョンし再活用することにより、住宅地における歴史的建造物の新たなあり方を示す。

アーバンヴィレッジとは、1992年にイギリスで生まれた言葉。様々な人や用途が共存する連続可能なコミュニティ形成を目指す動きのこと。伝統的なコミュニティの維持と安全性や生活の確保などを目的としている。ここではそのようなコミュニティを形成できる都市のことを指す。



かつては四郷の産業のシンボルであったその土地、その建物を、

四郷が住宅地となり、より住みよい姿を目指す今、

四郷の交流のシンボルとして再生する。



産業近代化直前であった新米富田市の富田製糸工場。世界遺産に登録する数ヶ月前の姿が写されている。

旧大和製織機織工場を前身とし、近江長岡天守の倉が改装された。市民の芸術活動を支援する統合文化施設となっている。



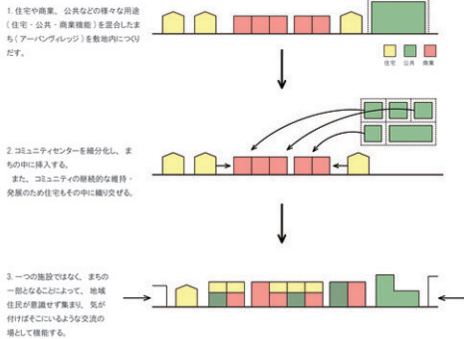
四郷地区の3つの歴史が特徴的な3〜4フロア。1923（大正12）年に完成した貴重な近代建築にも関わらず取り壊されてしまった。

四日市市の三笠堂土倉倉庫（旧三井工業製三笠製糸所倉庫）。1995（平成7）年に第一回四日市都市景観賞において景観部門賞を受賞したが、取り壊されてしまった。

diagram

program

現在のまちの中に、コミュニティセンターを溶け込ませることは難しい。そこで、まちの一部にそのような空間をつくり、まちに向け込ませることを考えた。



design

製糸工場として築いていた建物を彷彿とさせるが、中に入ると全く新しい空間が広がる。

敷地の変化



形態の決定



public & private

ここでは広場なども、その性質によって public なもの、private なものも表現している。それ以外にも性質は以下のようなものである。

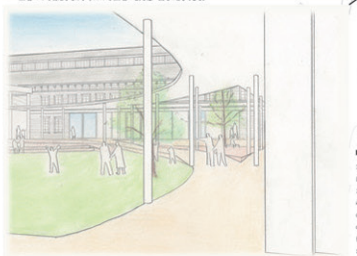
● public — 公共性の強いもの、誰もが気軽に利用できるもの。

● private — まちと密着した住民向けのもの。しかし、住民専用のもとは限らない。

▼ マルチタビリティへ向かう。キヤベドとつながる道。カフェやコートハウス、講義室などが並び、もう一方には public な広場がある。



▼ 緑系工場へつながるキヤベド。工場への導線となが、public な広場へと繋がるように設計される。



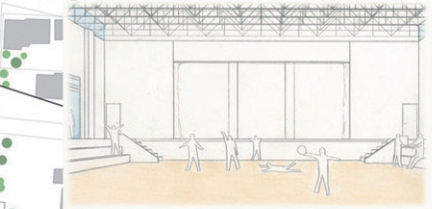
▼ コンバージョンされた緑系工場内部。オープンスペースからは工業実習室での活動が見え、その隣側、講義室や実験室・展示室・会議室がある。



▼ アトリウム内部。多目的ホールとして活用して機能する。様々な活動が同時に起こることで、まちの交流の場となる。



▲ 住民向け多目的ホールに囲まれた、小さな子供のための遊び場。子供たちが安心して遊べよう、public な広場とは異なり、人混みの少ない、落ち着いた空間となっている。



▲ 多目的ホール。講義やイベント、市民の活動の発表の発表の場となる。それぞれの活動が同時に起こることで、まちの交流の場となる。此所の子供たちのための遊び場となる。

配置図 1:600

●公共と商業の混在

1階部分は基本的に公共と商業が混在する空間となっている。
 その大きな意図は、コミュニティセンターをより身近に存在させることにある。何かをする、休めた人が興味をもた、さらに他のものに誘われる。そのような流れが生まれることを意図して、公共と商業の混在した配置と機能を考えた。

- 商店・野菜直売
 商店街の再興・再発育、
 直売店・直売市場として機能する。
- オープンショップ
 多目的な商業スペースとして機能する。
- 様々な講座
 様々な文化活動や講座を実施して、
 暮らしに文化を盛り込む。知識の伝達。
- レストラン
 店舗で20人ほどの
 食料、酒類を扱う。
- 工場実習室
 工業的な学び
 実習に合わせた空間とする。
- 調理実習室
 調理実習などを行い、
 食文化を伝える。
- 食品ショップ
 惣菜などさまざまな食品を扱う。
- 本屋・レコメンドショップ
 本やCDなどを取り扱う。

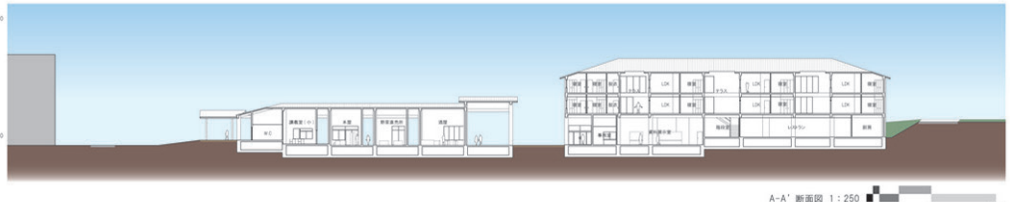


●高低差のある敷地特性を生かした断面

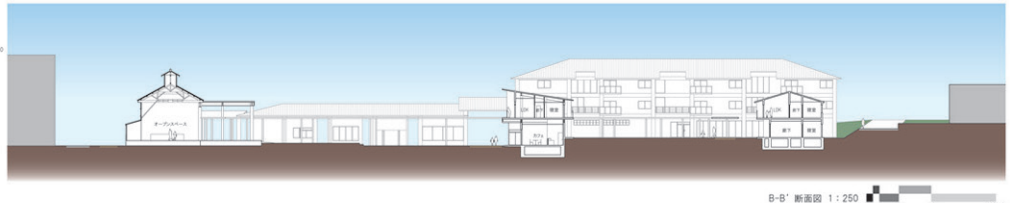
現在
 敷地内に高低差はなく、敷地外とは1200~4000mmの高低差がついている。この高低差により、敷地内外は分離された空間となっている。緑あふれる水害対策が、湿気を溜めて、理由は分かっていないが、床面が陥没設計されている。

↓

敷地内部に1200mmの高低差をつけることにより、敷地内は一体の空間に感じられるが、性質の違いを2つの広場をつくらせる。また、敷地北側道路との高低差を緩和し、敷地内へ様々な場所から入ることができるようすることで、敷地内外につながりをもたせる。

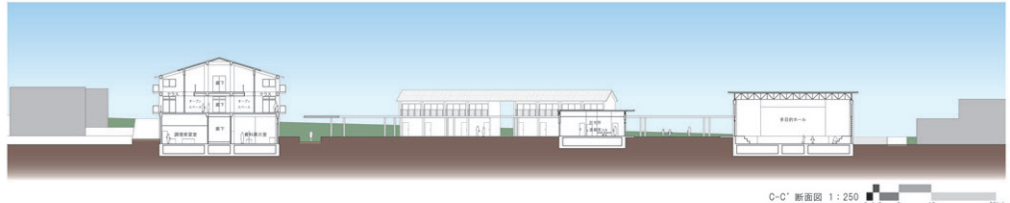


計画
 さらに、それぞれの広場を囲むように建物が配置されることにより、広場の性質が強くなる。しかし、広場同士を分離するのではなく、キャンビーや、庭地のような空間をつくることにより、つながりは保たれる。また、南側の道路が狭くならないことを念頭に、オープンスペースとなればスペースを創出。敷地と道路の広さの関係を考慮し、敷地と道路を合わせることで、緑あふれる広場と一体の空間に感じられる。



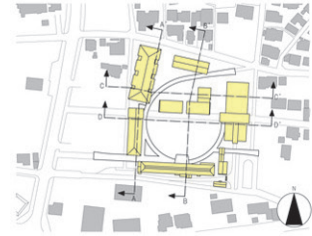
●privateな広場における断面

privateな広場は、落ち着いた雰囲気のあるレストラン、公共、住居の機能をもった建物に囲まれている。その広場の中には、住人のための落ち着いた空間と、託児所と多目的ホールに囲まれる、小さな子供の遊び場がある。



●publicな広場における断面

publicな広場は商業、公共の機能をもった建物に囲まれている。その広場は公園のような、にぎやかで大きい、ひとまとまりの空間となっている。



●canopy

・つながる

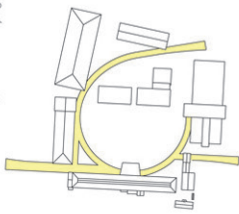
一工場で出来ていた当時の建物の配置の中にもルールのようなものは見られない。そのような建物の配置の中で、一貫性を示し、つながりを表現する。

・導く

一工場への導線となり、人々を工場へと導く。また、敷地内に回遊性をもたせ、人々をあらゆる場所へと導く。

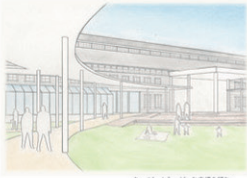
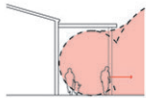
・ぶつかる

一コトバジンの持つ魅力の一つである。異質なもののぶつかりを、工場向けではなく、敷地全体で表現する。



●public な広場での canopy

高さが高いため、広場と建物の一体の空間として感じられる。歩行者は広場と建物の間に立ち、広場は様々な人々で賑わい、公園のような空間となる。



キャンパーからpublicな広場を望む

●private な広場での canopy

高さが低いため、広場と建物の一体性は弱くなる。通行人通りは感じられるが、歩行者は建物の広場へと出にくく、住民のための落ち着いた、庭のような空間となる。

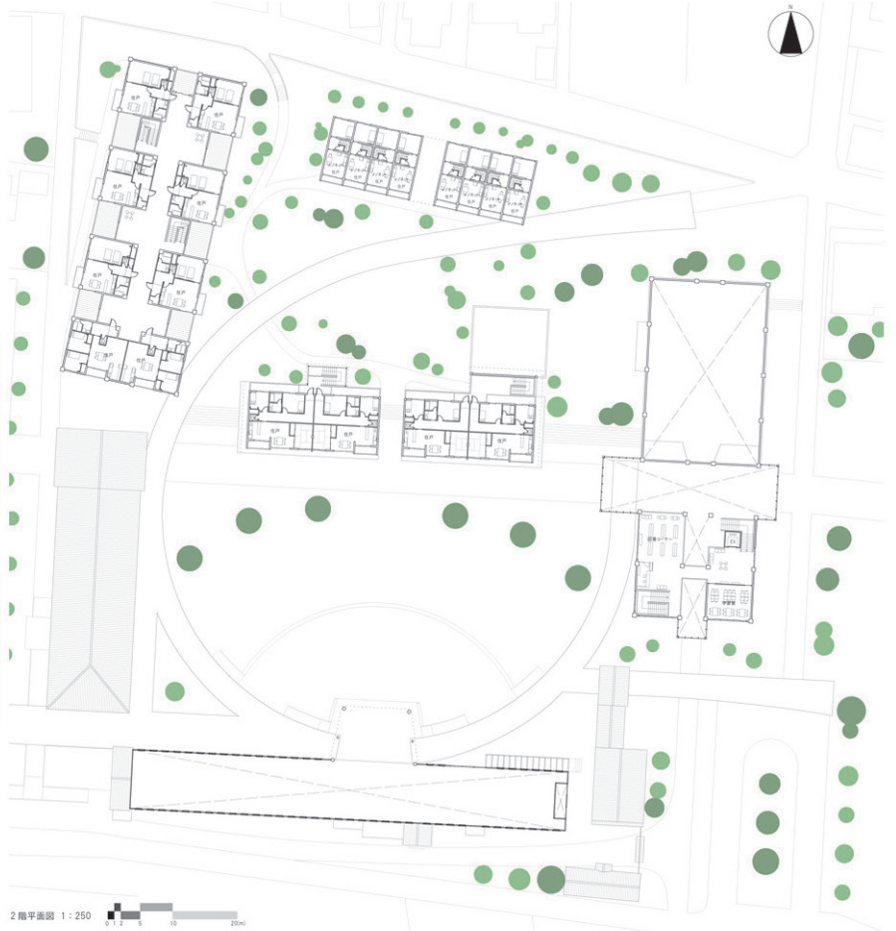


キャンパーからprivateな広場を望む

●屋根



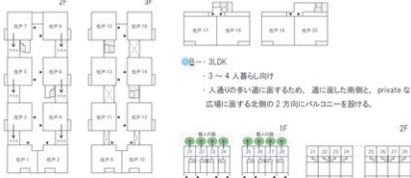
人を抱き込み、 outgoing イメージ。ここは特別な空間であるが、一つの施設ではない。コミュニティセンターの利用者だけでなく、買い物をする人や住民、散歩をする人、バイクの利用者など様々な人々が行き来し、交わる場所である。



2階平面図 1:250

●住居機能

基本的に敷地内北側建物の2,3階部分は集合住宅となっている。住居は経験的なコミュニティの維持・発展に欠かせない機能である。敷地内に、昼夜関係なく人がいることが、このことこそ施設ではない。まちの一部とする条件の一つだと考えた。



●1LDK, 2LDK

●1LDK, 2LDK
 ・専ら 2〜3人暮らし向け
 ・中庭下の平面形、日射・採光を考慮し、住戸間ツボやを挿入している。
 ・3階部分より日射が強い2階部分の住戸には、それぞれのLDKとつながるテラスを設ける。テラスは完全に個人の空間とせず、オープンスペースに向け開口をとることにより、庭のような空間となる。

●2LDK

●2LDK
 ・2〜3人暮らし向け
 ・メゾネット型
 ・1階北側の寝室からは、各住戸の個人の間に入る事ができる。
 ・敷地北側への壁とならないように高さを抑え、屋根は一続きだが中庭を二分化した。



3階平面図 1:250

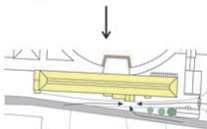
●既存の緑糸工場を生かした立面



●歴史的緑糸工場には壁があり、門以外からは中に入ることはできない。
 ・ファサードは老朽化している部分はあるが、昔のまま残されている。
 ・木が茂っているため、そのファサードは見えにくい。
 ・緑糸工場北側に並列して建てられていた建物が取り壊されてしまい、現在は普通住宅が行われている。



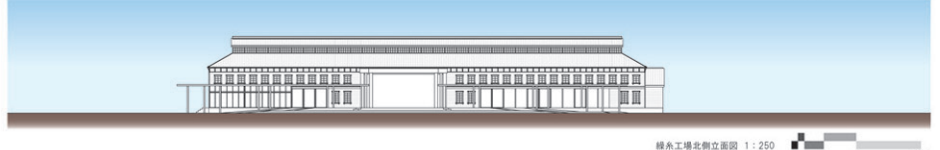
現在の敷地の南側道路。壁があり、木が生い茂っている。



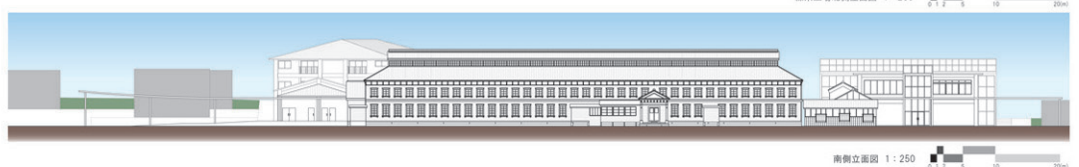
●計画一 壁をなくすことにより、だれもが気軽に敷地内に入ることができるようになる。
 ・木の壁を減らすことにより、南側道路よりそのファサードが見えるようになる。
 ・緑糸工場の南側のファサードは直し、修復されていない北側の面をコンバージョンに活かす。
 ・キャンパーや屋外スペースにより、緑糸工場は中心的存在として認識される。



西側立面図 1:250



緑糸工場北側立面図 1:250



南側立面図 1:250

